《公開講演会記録》

〝50後〟（50年代生まれ）
――ある中国「都会人」の道程

厦門大学外文学院副院長・博士　陳端端

紅旗の下に生まれて

追憶の時が来たのかもしれない。過ぎ去った事がややもすると目の前に浮かんでくる。何故だろう、私に、文化大革命の時代の記憶がこうも深く刻み込まれているとは……。今、「50年代生まれ」（〝50後〟）と呼ばれる者の１人として、人目には事業が盛んで、安定していると映る時代、こうした時代だからこそ私は、折につけ自分の成長の道筋を髪を梳くように解きほぐすことを始めた。

私たちの世代が少し物心のついた頃、いつも大人が「お前たちは紅旗の下に生まれ（〝生在紅旗下〟）、蜜のように甘い水の中で大きくなった（〝長在蜜水里〟）人間だ」と言うのを耳にしていた。なぜだか分からないが、この話は私にはほとんど何の満足感も与えず、おのずと大人たちが期待するように、それに恩を感じる感情などを表しようもなかった。

おそらく大人たちの目には、子どもたちの認識にはまだ深さが足りないと見えていて、そのため自然と我々に同じようなお説教を繰り返し聞かせたものだろう。おかげでほとんどの子どもの耳にはタコができていたと断定できる。

自分が母親になって、子どもの教育を始める時までずっと、自分が恩を感じることを知った年齢は、さて一体いくつだったのだろう?と折につけ思い返していた。実を言うと、これらのお説教の理解度については、「紅旗の下に生まれた」という言い方は文字通りに理解したにしても、「蜜のように甘い水の中で育った」という言い方にはまるで実感がない。

つい先頃、中国の中央テレビ局がテレビドラマ『知識青年』シリーズを放映したが、それを見て、たくさんの貴重な思い出がよみがえった。さらに去年４月、厦門大学幼稚園の創立60周年祝賀行事があり、園友たちが集まったことで、私の思い出はさらに呼び起こされた。

祝賀会で、私は幼稚園での楽しい生活体験を思い出そうと努め、壁に貼ってある黄色く変色した写真の中に、子どもの時の自分の姿を探そうと努めた。誰も自分の子どもの時のイメージを記憶できていないようだったが、原因はおそらく当時は鏡が非常に貴重だったのと、年齢が小さすぎたためかもしれない。

それから、子ども時分の私たちは誰もおしゃれをすることなど知らず、蝶結び

ができれば最大の満足であった。私が最も理解できなかったのは、1枚の写真を父母に見せて、私を探してもらった時、父は前列の左側を指し、母は前列の右側を指したことだ。失望した私は怒って両親にこう詰め寄った。「自分の子どもをあまりに気にかけなさ過ぎる。あまりに無責任過ぎる」。母はすまなそうにこう答えた。「あなたが小さい頃、私たちはあなたを見てやるどころではなかったの。しかもあなたは女の子だから、早く物が分かって弟の面倒を見てもらいたかったわ」。この答えは今日までずっと深い記憶として刻まれている。

厦門風景

中華人民共和国が1949年に成立し、国の主人公となった4億の中国人は、溢れるばかりの熱情をもって、社会主義建設に打ち込んだ。この平和な時代が始まって間もなく、中国に最初の出生のピークが現れ始めた。「人口論」研究の大家である馬寅初氏の学説があるにもかかわらず、中央政府はやはり人口が多いほうが仕事をするのに良いと考え、さらにソ連から「母親英雄」（10人の子を産んだ母親に贈られた称号）の奨励方法を導入した。したがって、私たちの世代の兄弟姉妹は基本的に3人以上で、2人というのはかなり珍しい。

これがつまり、「50年代生まれ」の大軍が出現した原因である。生まれて間もなく、何か大運動があるとかで、私たちの耳にも「反右派」「大煉鋼（土法高炉で製鉄に励む）」「人民公社」「総路線、大躍進」等等の言葉が吹き込まれ、私たちの目には、おのずといつも大人たちの忙しそうな姿が映っていた。

私たちは、幼稚園、託児所が毎日活動する場所であり、子どもを幼稚園に入れるにしても、多くの家長は子どもを「全托（週末に家に帰るだけ）」にしていた。

黄色く変色した写真の出現とともに、託児所と幼稚園での自分の情報が得られた。当時、私の世話をしてくれた託児所の先生のおかげで、写真の中の自分の位置がはっきりした。「祖国の花」と讃えられる一員として満3歳になったばかりの私は、頬を丸々とふくらませ、髪を2本のお下げに結って、かわいらしかったが、なぜか嬉しそう表情は見られなかった。

「男尊女卑」の思想が濃厚な福建省南部の閩南（ビンナン）地方では、女の子を託児所や幼稚園に入れることができるのは、都市に限られた。ただ、幼稚園ではいつも〝過家家〟遊び（ままごと遊び）をしたのを覚えており、私たちは父母による教育の印象と家庭の日常生活の様子を遊びの中に復元しようと努めた。

政治運動の時代

なぜかわからないが、父は政治運動のたびに審査を受けなければならず、小さい頃から父の楽しそうな笑顔を見ることは少なかった。毎回、政治的洗礼があるたびに父の名前が掲示板の上にあった。これについて、母の見方は、父が多くを話し過ぎ、余りに率直で、余りに愚直で、人が話そうとしないことを替わって話しているから等々、というものであった。

これについて、父が退職した後になっ

て、その訳を訊ねたところ、やはり強情に「うそは話していない」という答えだった。間髪を入れず、母が例によって「まったく頭が固いんだから」と言った。

幼稚園にいた頃、「3年の自然災害」（大飢饉）のおかげで、私の記憶の中では、お腹がいっぱいになる食事ができるということが最大の幸せだった。母は、毎日、厦門大学の教職員食堂から250グラムの米飯の配給を受けた時、辛い仕事をする父にお腹いっぱい食べさせたかったものの、物の分からない弟がいつも両親の手を押さえて御飯を食べようとし、少し分けてもらえるまで静かにならなかった。傍に立って唾を飲み込むだけで騒ぎもしない私を見て、父と母はいつも私の頭を撫でながら「やはり女の子は物が分かる」と言った。

私が小学校に上がる前の面接試験場で、担任教師の梁先生から「お父さんはどんな仕事をしているの？」と聞かれたのを覚えている。私はいつも母と退勤時間に職場の父を訪ねたが、工場長の父はいつも暇そうに厦門大学印刷所（現在の厦門大学出版社）の工場長事務室に座って新聞を読んでいた。そのイメージが私の記憶に深く刻まれていたためだろう、私は少しもためらわずに先生に答えた。「私のお父さんは新聞を読んでいます」

この答えに会場の先生たちがみなどっと笑い、私はあわてて父の後ろに隠れた。1963年、私は順調に厦門市の東澳小学校（現在の演武小学校）の1年生になったが、もし今であれば、この面接試験のおかげで間違いなく不合格であったと言い切れる。

小学校の1、2、3年生の時には、どんなめぐり合わせか知らないが、副級長、級長になり、成績優秀で、態度もよかったので、クラス最初の少年先鋒隊の一員となった。

しかし、よいことは長続きしない。1966年、4年に進級しようというところで文化大革命が始まった。赤い腕章をつけた紅衛兵が校庭に押しかけてきて、学校は造反に見舞われ、先生は批判され、教室の机と椅子が壊された。その時から、授業はあったとしても、「毛主席語録」が私たちの国語の教科書となった。

農村での労働（資料写真）

父が走資派（資本主義の道を歩む実権派）であるとされたことで、私はずいぶん遅れてようやく紅小兵（小学生で組織された紅衛兵予備軍）の隊列に加わることができた。

1968年になって、毛主席の「知識青年が農村に行き、貧しい農民（〝貧下中農〟）から再教育を受けるのは大変必要なことだ」という号令に応じて、中学生以上の学生たちはみな「志願して」（〝自願報名〟）農村へ下放し、「知識青年」となった。当時のみんなの熱意は、テレビドラマ『知識青年』に描かれたのと同じで、胸に大志を抱き、意気軒昂としていた。

しかし、聞くところによると、厦門駅の長く響く汽笛の音の中では、勇敢に都市戸籍を捨て、溢れるばかりの熱意を抱いて、これから農村に赴く厦門の知識青年も、自分を歓送する父母兄弟を前にしてやはり涙を流したという。

幸いなことに私が小学校を卒業する頃

になると、中央政府は、高等学校を卒業してから広大な天地で革命を行なう、つまり〝上山下郷〟を再選択してもよいと定めた。これにより、私は幸運にも中学校に進級できた。

中学生の時も、「毛沢東選集」がやはり必修の教科書であり、人並み外れた記憶力を持つ私は、その中のどの文章も暗誦することができた。私たちが学んだことを工農兵（労働者、農民、兵士）への奉仕に使い、革命事業の後継者となるために、教育委員会（現在の教育部）の指導で、学校にはさらに「工業基礎」「農業基礎」等の課目がを設置された。また、外国語課目もあったのだが、当時の英語の教科書は、第一課が「Long live chairman Mao.／毛主席万歳！」であった。

文化大革命（資料写真）

父の身分が「走資派」とされたため、私はあやうく政治審査で落第して、高校に進むチャンスを失うところだった。理由は社会主義の学校の教室では「ろくでなし」（〝狗崽子〟）を育成できないということだった。後に聞いたところでは、私たち姉弟は改造できる子女に属すると認定されたそうで、私と弟たちは順調に高等学校に進学することができた。

しかし、家庭の階級区分がよくないために、私と弟たちはいつも家にじっとしていた。紅衛兵による家宅捜索のおかげで、家にはまともな家具や余計な書籍はなくなってしまったので、私たち姉弟はいつも同級生から本を借りて、家で勉強した。

勉強への渇望

当時、教科書以外に、小学生と中学生の時代にこっそりと『紅楼夢』、『水滸伝』、『三国志演義』、『聊斎志異』（清代初期の短編小説集）、『十万個のなぜ？』（よろず疑問解決本）、『ソ連の事件簿』などの本を何度も読んだ。当時は借りてきた本を汚さないように、私たちは新聞紙などで表紙をしっかりカバーしてから読んだことを覚えている。この類の本は特に人気があり、いつも約束の日の前に同級生から「返せ」という催促を受けた。

その後しばらくの間、一時（１９７３～76年）、名誉回復された鄧小平が全国に「授業を再開しつつ革命をやる」（〝復課闘革命〟）運動を起こした。数年という短い期間でしかなかったが、私たちは確実に多くの知識を学んだ。私たち姉弟は比較的真面目に勉強し、私の１歳下の弟は数学など理科の成績では学年トップで、先生に絶賛される学生となった。私の成績もクラスでずっと上位にあった。

私が最も心配だったのは、父がいつまでも名誉回復できないことだった。父は農場労働に下放され、給料も減らされ、いわゆる工農兵の再教育さえ受けさせられた。母の愁いに沈んだ顔を見て、私は自分から進んで、家で弟の世話をすること、家全体の家計のやりくりに責任を負うことを引き受けた。

家の経済的困難により、私たち姉弟３人の学費（学期ごとに４元）はやむを得ず、順番に納めざるを得なかった。学校

は学期が終了する2カ月前に納入の催促を始める。方法は先生がクラスで名前を呼び、注意を促すのである。姉の私はいつも学期末の最後の数日になって、やっと納めるので、名前を呼ばれるのはいつものことであった。そのたびに私の気持ちはささくれ立ち、その中には、大声で名前を呼ぶ先生に対する恨み言、学校に対する恨み言、さらには父母に対する恨み言さえ入り混じっていた。

高校を卒業する前、国の政策にしたがって、各家庭で1人「都市に残る（下放の必要がない）」ことが許された。その他の高校卒業生は必ず勇んで志願して農村に行かなくてはならなかったが、上の弟は私と1歳しか違わなかったので、父母と相談した上で、都市に残る枠を弟に渡すことを決め、私自身は志願して知識青年になった。小さい頃から父母の元を離れたことがなかったので、父母は心中非常に別れがつらかったはずだ。

しかし、私は早く「繰り上げ」（〝上調〟）の機会が得られるよう心の中でひそかに祈った。それは1972年に国が次のような新政策を公表したからである。

知識青年は農村で2年過ごして、態度良好であれば、「繰り上げ（地方、農村から都市へ移動）」の機会を得ることができる。つまり戸籍を都市に移し、大学進学、軍への入隊、就職等の機会を与える、というのである。これこそ疑いなく私たち知識青年が、いわゆる上山下郷に「志願する」原動力であった。なぜなら、都市に住む者は仕事を探すのが難しく、こうした迂回戦術によらないと自己の夢を実現できないからであった。

農村では、私は積極的に労働に参加し、苦しいことを恐れず、仕事を怠けなかった。2年余りの態度はその土地の農民に十分認められて、生産隊の重要な一労働力となった。

1976年の秋に「四人組（江青、張春橋、姚文元、王洪文ら反革命分子）」が打倒された後、幸運にも大学入試への参加資格を得た。当時は地区ごとの試験で、試験科目は「国語、数学、英語、物理、化学、工業基礎、農業基礎」の7科目だった。そして思いがけず筆記試験1番の成績で、県城（県人民政府が置かれている町）で行なわれる英語の面接試験に参加するチャンスを得た。

福建省の農村

下放女子学生（資料写真）

かつて高校の英語科の代表であった私は楽々と厦門大学の合格資格を獲得し、大学生になるという願いを達成した。大学では、私たちは飢えるがごとく渇くがごとく、真剣に学んだと言うことができる。誰もこの貴重な時間を浪費したくなかったのだ。成績がずっとトップクラスだった私は、ついにある国立大学の外国語教師になることができた。

生きづらかったが

国は人口を抑制するために、１９７９年に晩婚、晩育（比較的年を取ってからの出産・子育て）、１人っ子政策を制定し、実行し始めた。50年代生まれの人間はほとんどこの制度の規制を受けたのだった。

私たちの世代の者は今日まで歩んできた道のりを思い返すごとに、その多くがため息交じりに次のような感慨を口にする。私たちの世代の者は非常に生きづらかったが、何事であれとにかく時代に追い付いた。確かに、紅旗の下に生まれ、蜜のような水の中で育った私たちの世代は、何事であろうと時代に追いついた。

しかし、これは私たちにとって、悲劇であったのかそれとも幸運であったのか、見方はいろいろであり、認識はまちまちである。ただ興味深いのは、今日、「50年代生まれ」としての私たちは、誰も過去の如何なる人に対しても、さらには時代に対しても、自己の国家に対してさえも、恨みを抱こうとは思わないことである。

私たちはそれぞれ、自分のため、家庭のため、社会のためにささやかな力を尽くす。興味深いのは、そうした運に恵まれなかった者でも普段は楽しく過去の経験を思い出すことである。こうした環境こそが私たち「50年代生まれ」一人ひとりの頑強な意志、不屈の精神、確固不動の信念を育成したということを信じて疑わない。

今、私は「50年代生まれ」であることを胸を張って誇りに思う。「50年代生まれ」に幸多かれ！（翻訳　日野正子会員）

（２０１２年12月14日・講演会）

講師略歴（チン　タンタン）

１９５６年　中国厦門市生まれ
１９７４年　泉州市石井人民公社へ下放
１９７７年　厦門大学日本語科入学
１９８０年　国立華僑大学教員
１９９６年～厦門大学教員
２０１２年～東京大学客員研究員
著書　『意識と表現』『言語、文化と認

50年代生まれの20文字

陳端端さんの講演に関連して、会員の姜晋如さんから「50年代生まれ」の運命はよく次の20文字で表現されるという投稿がありました。

それは「出生就挨餓、上学就停課、畢業就插隊、只能生一箇」の20字。

日本語に訳すと、「生まれてすぐに飢饉に見舞われ、入学すれば学級閉鎖、卒業すると農村へ下放、子どもを産むときは1人っ子政策」

以下は姜さんの背景説明――「50年代生まれの人間たちは、生まれて間もなく50年代末から『3年の自然災害』に見舞われ、育ち盛りの時期を食べ物不足の中で過ごした。

小学校に入学すると、学校は『文化大革命』の政治運動に巻き込まれて、授業はお休み、しばらくは新1年生の募集もなく、先生たちは毎日政治運動に参加させられた。

中学か高校を卒業すると、すぐ『上山下郷』運動で田舎に下放、『農民に学べ』という名目で農作業をさせられた。成人して結婚、いざ子どもを産もうという70年代末からは、『1人っ子政策』で子どもは1人に制限された」